

巻 頭 言

子ども受難の時代

日本は戦後の混乱期を経て、高度経済成長と呼ばれる急激な成長・発展を遂げ、世界でも有数の経済力をもつ国家となりました。その後、1990年代初頭のバブル崩壊をきっかけとして平成不況と呼ばれる経済の長期低迷が続きました。2000年代以降は景気回復の動きが見られましたが、昨年来よりアメリカを震源地にした世界規模の大不況に見舞われています。このような経済構造の急激な変化は企業の倒産やリストラによる失業、ネットバブルの崩壊、デフレ現象などを引き起こし、社会環境へも大きな影響を及ぼしています。いじめや凶悪な少年犯罪の増加、そして毎日のように流れる子ども虐待のニュース、世界でも有数の超少子・高齢化社会に突入し、社会保障費を支える労働人口の減少や社会生活の活力低下が懸念されています。また、社会の基本単位である家庭にも経済的な不安、子育てに関する不安、将来に対する不安などのかたちで影響を及ぼしています。社会環境の問題は子どもにも大きな影響を及ぼし、現代の子どもにとってはまさに受難の時代が到来していると言えるでしょう。

第5回学術大会は、テーマを「未来を創る、看護と福祉—子どもたちの受難のかたち—」とし、子どもの問題に焦点をあて、子ども虐待防止の動向と課題をふまえながら看護と福祉の職種間連携について考えていきました。大会の講演では、厚生労働省社会保障審議会児童部会委員として子どもの虐待防止政策に携わってこられた西澤哲氏に、子ども虐待防止の動向と課題についてご提言をいただきました。シンポジウムでは、市町村の機関で活躍されている卒業生の臨床家に登壇していただき、子どもの虐待防止対策の現状と職種間連携について検討していただきました。子どもの虐待防止に対する積極的な報告と地域のネットワーク作りの難しさなどの多くの課題がだされました。

また、本大会では新たな試みとして、看護・福祉分野の相互理解を図ることを目的に、各分野の研究、教育、臨床活動の中から報告を受け、討議を深めるための自由な機会として交流集会を設定しました。看護分野からは「看護の現場で実践する倫理調整」と題してCNSの会の報告をいただきました。福祉分野からは「地域包括支援センターの取り組みと課題」と題して岩見沢市地域包括支援センターの報告をいただきました。

最後に、本学会が在学生、卒業生、教員の交流を図る場として、さらには看護と福祉の実践と学問的蓄積が図られる場としてますます発展することを祈念しています。

2009年3月31日

北海道医療大学看護福祉学部学会
第5回学術大会長 鈴木 幸雄